

### 第三章 朱雀院の物語 朱雀院の五十賀の計画

[第一段 女三の宮と紫の上]

\*入道の帝は(出家なされた朱雀院は)、御行なひをいみじくしたまひて(御勤行を熱心になさって)、\*内裏の御ことをも聞き入れたまはず(御所の御様子にも興味をお持ちなさらず)、\*春秋の行幸になむ(毎年恒例の帝の御出座しをお迎えになる時にだけ)、昔思ひ出でられたまふこともまじりける(昔の御世が思い出されなされることもあったくらいです)。\*「入道の帝」は注に<朱雀院をさす。>とある。与謝野訳文には<法皇>としてある。「法皇」は<出家した上皇の称。太上法皇の略。上皇の出家は、聖武上皇・孝謙上皇・清和上皇の例もあるが、法皇を称したのは、寛平法皇と呼ばれた宇多上皇が初例。>と大辞林にある。さて、どうしたものか。このまま「入道の帝」で通しても、当たり前だが間違いではないし、むしろ本文を尊重した読み方と言えなくもない。何よりも、当時の宮廷内で「入道の帝」という呼び方が受け入れられ易かったらしいこと、は示していそう。が、現代の読み手の、先ずは私の認識として、この出家した朱雀院に対して、客観性が有って最大限にこの物語に馴染む呼称は、やはり<朱雀院>しか思い付かない。場合によって<出家なされた>などを補語した方が意味が通り易い時があればそうするが、人物特定としては<朱雀院>が最も分かり易い。「法皇」は一面では出家を示すが、もう一面では政治への関与ないし権力志向を示す呼称、という印象が私にはあるので<朱雀法皇>は此処の文意には不相応に見える。ただし、是も別の場面では有効な呼称になるのかも知れない。\*「うちのおんこと」は<御所のまつりごと>だろうが、「聞き入れたまはず」は単に<興味を示されない>のではなく、朱雀院を今上帝の父院と見て、その影響力を頼んで旧臣らが陳情や推挙を願って日参して来るのを、出家の身ゆえに与り知らぬと断った、という事情説明なのだろう。しかし、縁者らは僅かの配慮だけでも期待して日参は続いたのだろう。少なくとも失点だけは避けたい。客観基準を掲げた律令政治の核心部が王家権威を支える権勢家の統率力による縁戚縁故政治だという笑えない現実、は今でも変わらない。ただし、全体が豊かに発展した社会にあっては、草創期の絶対的な権勢家とその存在を睹して責任を果たしたことに比して、多数いる専門家責任者の強固な責任意識に運営が任されている、という統括管理の複雑さ、という困難が有りそう。\*「春秋の行幸」は「しゅんじょうのぎやうがう」と読みがある。注には是を<今上帝の父朱雀院への朝覲行幸をさす。>とある。「朝覲(てうきん)」は古語辞典に<中国で昔、諸侯または属国の王などが参内して、天子に拝謁すること。>とあり、「朝覲の行幸」は<天皇が太上天皇や皇太后の御所に行幸し、恭敬の礼をつくすこと。年頭に行われる恒例の儀と、踐祚・即位・元服の後に行われる臨時の儀とがある。>と大辞林にある。「春秋」は<毎年恒例>くらいの意味だろうか。

姫宮の御ことをのみぞ、なほえ思し放たで(それでも朱雀院は女三の宮の御行く末についてだけは今だにご心配なさって)、この院をば(こちらの六条院の方を)、なほおほかたの御後見に思ひきこえたまひて(先ずは表向きの御依頼先に思い申しなさって)、うちうちの御心寄せあるべく奏せさせたまふ(帝には身内としての御厚情を賜わるべく上奏あそばします)。\*二品になりたまひて、御封などまさる(それが奏効して女三の宮は二品にお成りで禄高の加増がありました)。いよいよはなやかに御勢ひ添ふ(ますます華やかに御威勢が備わります)。\*「二品(にほん)」は王族身分の品位(ほんい、一品から四品の位階)の内、二番目の地位待遇。注には<「禄令」によれば、親王は、一品は八百戸、二品は六百戸、三品は四百戸、四品は三百戸で、内親王はその半分とされる。すなわち、女三の宮の二品内親王は三百戸の御封。>とある。「御封(みぶ)」はざっと食い扶持のことで、「三百戸」は三百人分の年間食料米や食費あたりか。

対の上、かく年月に添へて(対の上はこのように時が経つに連れて)、かたがたにまさりたまふ御おぼえに(何かにつけて増さって来なさる姫宮の御評判の高さに)、

「わが身はただ一所の御もてなしに(私はただ殿の御一存で)、人には劣らねど(姫宮に劣る立場に成らずに済んでいるが)、あまり年積もりなば(もっと年を取ったら)、その御心ばへもつひに衰へなむ(その殿の御愛情も結局は衰えるだろう)。さらむ世を見果てぬさきに(そういう目に遭わぬうちに)、\*心と背きにしがな(自分から出家してしまいたい)」 \*「心と」は< [副] 自分の心から。自分の心の持ちようから。>と大辞泉にある。「と」は< ~として>と範囲規定する格助詞だろうか。

と、\*たゆみなく思しわたれど(と一度は殿に諫め止められた後も、ずっと思い続けていらっしやっただが)、さかしきやうにや思さむとつつまれて(殿がくどいと煩く思いなさるかと遠慮されて)、はかばかしくもえ聞こえたまはず(重ねては申し上げなさいません)。 \*「たゆみなく思しわたれど」は、二章二段に語られた<「この世はかばかりと見果てつる心地する齢にもなりにけり。さりぬべきさまに思し許してよ」とまめやかに聞こえたまふ折々あるを、「あるまじく、つらき御ことなり。みづから深き本意あることなれどとまりて、さうざうしくおぼえたまひ、ある世に変はらむ御ありさまの、うしろめたさによりこそ、ながらふれ。つひにそのこと遂げなむ後に、ともかくも思しなれ」などのみ妨げきこえたまふ。>たものの、その後も「たゆみなく思しわたれど」という語り、のようだ。

内裏の帝さへ(朱雀院ばかりか今上帝までもが)、御心寄せことに聞こえたまへば(姫宮への御心配を特にお持ちなので)、おろかに聞かれたてまつらむもいとほしくて(殿はおろそかな処遇とお耳にされるのが具合が悪いので)、渡りたまふこと(姫宮の御部屋にお泊りなさるのが)、やうやう\*等しきやうになりゆく(次第に対の上と同じように成って行きます)。 \*「等しきやうになりゆく」は、下文にも「さるべきこと、ことわりとは思ひながら」とあるように予想はされたことだろうが、二章二段の段頭に<姫宮の御ことは、帝、御心とどめて思ひきこえたまふ。おほかたの世にもあまねくもてかしづかれたまふを、対の上の御勢ひにはえまさりたまはず。>と、御世代わりがあっても、なお対の上が姫宮に優勢だと語られてから然程は時が経っていないように思えるが、もう「やうやう」と語られる。住吉参詣は十月二十日のことだったので、今はそろそろ年末に差し掛かる頃の話かと思われるが、御世代わりは春の三月頃で、その当初はまだ紫の上が優位だったが、半年もすれば時代の趨勢が顕在化してきた、ということかも知れない。確かに、変わり目は一気に来る。

さるべきこと、ことわりとは思ひながら(そうなって当然とは思ふものの)、さればよとのみ、やすからず思されけれど(やはり残念に心落ち着かず紫の上はお思いだったが)、なほつれなく同じさまにて過ぐしたまふ(それでも表向きは変わり無く穏やかに暮らしなさいます)。

春宮の御さしつぎの女一の宮を(皇太子のすぐ下の女一の宮を)、こなたに取り分きてかしづきたてまつりたまふ(紫上は東の対に引き取って大切に御養育なさいます)。その御扱ひになむ(その御世話焼きで)、つれづれなる御夜がれのほども慰めたまひける(遣る瀬無い殿の夜離れのほども慰めなさいます)。いづれも分かず(紫上は桐壺女御の御子たちを、分け隔て無く)、うつくしくかなしと思ひきこえたまへり(いとしくかわいいと思ひ申しなさいました)。

## [第二段 花散里と玉鬘]

夏の御方は(夏の町の御方である花散里は)、かくとりどりなる御孫扱ひをうらやみて(このように男女とりどりにいる紫上の孫の子守を羨んで)、大将の君の\*典侍腹の君を(大将君の典侍腹の男の子を)、切に迎へてぞかしづきたまふ(是非にと引き取って御養育なさいます)。 \*「典侍腹の君(ないしのすけばらのきみ)」は十三年前に五節の舞姫を勤めて、その後に典侍になったであろう、惟光の娘腹の男御子であろう、と思われる。が、源氏君は当時は学生君だったが、舞姫に童殿上の姫の実弟を通じて恋文を送って、それを惟光にも見られて、惟光は歓迎した、という話は少女巻六章にあったが、その後の二人がどうなったのか、あくまでも源君の正妻は藤原姫であり、現在も源君は藤原姫と三条邸に住んでいるわけだが、この典侍との関係やその具体事情などについて、決して些細な話とは言えなさそうだし、現に今も話題になっているというのに、今まで全く語られていない、というのは脱稿以外には考えられない。ただ、この「典侍腹の君」も話の調子からすると、最近になって引き取ったようで、まだ幼児ではありそうだ。が、やはり空白の五、六年は決して空白ではなさそうだ。それと、まあ惟光なら、自家の孫も六条院の孫格を期待して、婿の養母である花散里に預ける、というのも割とすんなり進む話には聞こえる。因みに、源君は本年で25歳、その北の方の藤原姫は27歳だが、十三年前に五節舞姫だった惟光女はその年に典侍出仕するかの話だったし、その実弟が当時12歳の源君と「きむぢらは同じ年なれど、いふかひなくはかなかめりかし」(少女巻六章四段)と惟光に言われていたので、典侍は既に裳着を済ませた16歳くらいだっただろうから、今なら28,9歳くらいだろうか。

いとをかしげにて(とても可愛らしい子で)、心ばへも、ほどよりはされおよすけたれば(性格も年の割にはしっかりしていたので)、\*大殿の君もらうたがりたまふ(家長たる源氏殿も手応えの有る子と可愛がりなさいます)。 \*「大殿の君(おとどのきみ)」という呼び方は以前に有っただろうか。「君」は貴人の尊称だから、有っても不思議はないのかも知れないが、「大殿」自体も尊称であり、「君」を日常的な尊称と見れば変な重複感が出るので、此处の「君」は特別な意図がある語用かと思う。となると、この「君」は一般尊称ではなく<主君、主人>の意味で、花散里と大将君と源氏殿との距離感を示した語用として読むべきもの、のように思う。

少なき御嗣と思ししかど(源氏殿は少ない子宝に後継者不足とお思いだったが)、末に広がりて(末広がりて孫を多く儲けて)、こなたかなたいと多くなり添ひたまふを(大将君にも桐壺女御にも大勢増えていらしたのを)、今はただ、これをうつくしみ扱ひたまひてぞ(今はただこれらの孫を可愛がってお守りなさる事で)、\*つれづれも慰めたまひける(かつての憂いを晴らしなされたのです)。 \*「つれづれも慰めたまひける」は、渋谷訳文に<退屈さを紛らしていらっしやるのであった>とあり、与謝野訳文には<満足しておいでになるようである>とある。此处の部分だけを取り出せば、確かに<空しさを埋めていらした>という言い方に見えるが、この言い方の文意は「少なき御嗣と思ししかど」を受けたものとして、大意としては与謝野文のように読むべきもの、のように思う。が、本文に<満足しておいでになる>という言い方は何処にも無い。意識としては成立していそうだが、読みとしては少し不誠実だ。で、改めて読み直せば、本文の「つれづれ」という語の<所在なさ=遣る瀬無さ=日頃の鬱憤>という語感、正に「少なき御嗣と思ししかど」のことに違はなく、であれば「慰む」は<紛らす>ではなく、その<憂さを晴らす>である筈だ。

\*右の大殿の参り仕うまつりたまふこと(藤原右家の源氏家婿殿である右大臣が六条院に日参して殿の御用に仕え申しなさること)、いにしへよりもまさりて親しく(以前に増して親しく)、今は\*北の方もおとなび果てて(今はその夫人たる養女の藤原姫もすっかり落ち着いた生活ぶり

で)、かの昔のかけかけしき筋思ひ離れたまふにや(昔の殿との色事めいた遣り取りにこだわりはお持ちで無いらしく)、\*さるべき折も渡りまうでたまふ(どんな時にも出かけておいでになります)。\*対の上にも御対面ありて(対の上ともご面会なさって)、あらまほしく聞こえ交はしたまひけり(とても仲良くお話し合い為さいます)。 \*「右の大殿」は「みぎのおとど」ではなく「みぎのおほとの」と読みがある。また、注にはく鬚黒右大臣兼左大将。今上帝の外戚。>とある。今上帝は朱雀院とその御世の承香殿女御との間の御子であり、その承香殿女御の兄がこの「右の大殿」なので、今上帝の伯父君に当たる。そして、この右大臣は藤原右家筆頭にして六条院の養女となっていた藤原姫の婿殿でもある。写本の段階からこの人物は広く「鬚黒」と標識されていたらしいが、私は個人的にこの人物の客観的立場の重要性からして、また私がく毛深さ＝無骨さ＝実直さ>とは思えない所為か、「鬚黒」という表面的な、それも決して本質を代表してはいなさそうな一面的な特徴、それも決して然程は印象深くも無いもの、を掲示して一端の脇役扱いする感性には馴染めないのも、強いてく婿殿>および必要があればく藤原右家筆頭>を補語したい。 \*「北の方もおとなび果てて」は注にく玉鬘は鬚黒の北の方、二児の母親としてすっかり落ち着いた年齢と地位にある。現在三十二歳。>とある。 \*「さるべき折も」の「も」という係助詞で特に規定されるべき「さる」が示すものが分からない。で、「さるべき」を一般的なく立派な、正式の、当然の>という意味と取っても文意が見えない。で、むしろ「べし」をく発意>と見て、「さるべき折も」をく思い立った時はいつも＝どんな時にも>と読んで置く。 \*「対の上」は式部卿官の娘であり、右大臣の先妻の腹違いの妹に当たる。それが、右大臣の後妻の養女と親しくしては、式部卿官に対しては不都合な面もありそうだが、互いに妾腹の女同士で数奇な育ち方をした上で、現在の高い地位にある、という当人たちにしか分からない共感があるのかも知れない。

\*姫宮のみぞ(そのように皆は年を重ねて暮らしぶりも変わったが、姫宮だけは)、同じさまに若くおほどきておはします(以前と同じように幼く大様でいらっしゃいます)。女御の君は(源氏殿は桐壺女御のことは)、今は公さまに\*思ひ放ちきこえたまひて(今は帝妃なのだとして思うのは諦めなさって)、この宮をばいと心苦しく(この姫宮のことをとても気懸かりに)、幼からむ御女のやうに(幼げな娘のように)、思ひはぐくみたてまつりたまふ(思って御養育申し上げなさいます)。 \*「姫宮のみぞ」は注にく六条院の源氏、紫の上、花散里らの「御孫扱ひ」、そこに出入りする玉鬘のすっかり落ち着いた年齢。そうした中で、女三の宮のみが変わらず若く幼いままでいる。二十一、二歳になっている。柏木との密通事件の伏線。>とある。女三の宮は20歳で今上帝と同じ年だったかと思うが、別に21,2歳でも構わない。因みに、「女御の君」たる桐壺女御は18歳。 \*「思ひ放ちきこえたまひて」の主語は源氏殿、と注にある。「女御の君は」の「は」は主格ではなく対象格を示す格助詞、ということらしいが、紛らわしい。

### [第三段 朱雀院の五十の賀の計画]

\*朱雀院の(朱雀院が姫宮に)、 \*注に、下文の「今はむげに」からく以下「渡りたまふべく」まで、朱雀院から女三の宮への手紙。ただし、文末の引用句がなく、地の文に流れる。>とある。姫宮という宛先が省かれているのはとても分かり難い書き方だが、どうやら是は、上文の「姫宮のみぞ」から続く一連の講談の内らしい。

「今はむげに世近くなりぬる心地して、もの心細きを(このところいやに先が短い気がして何だか心細く)、さらにこの世のこと顧みじと思ひ捨つれど(今更はこの世を顧みることはいらないでおこうと出家したもの)、対面なむ今一度あらまほしきを(会うだけはもう一度しておきたいものと)、もし\*恨み残りもこそすれ(思い残りが無いように)、ことことしきさまならで渡りたまふべく(おおげさなことでなしにお越し頂きたく)」、聞こえたまひければ(手紙をお遣し為された

ので)、 \*「恨み残りもこそすれ」は注に<懸念の語法。恨みが残ったら大変だ。>とある。下に<ば、本意なからむ>などが省かれているのだろう。で、その省略が「ことことしきさまならで渡りたまふべく」を手紙文と地文との洒落語用に仕立て上げている、のだろう。

大殿も(おとども、源氏殿も)、

「げに、さるべきことなり(確かに尤もな話だ)。かかる御けしきなからむにてだに、進み参りたまふべきを(こうした御示しが無くても進んで参上すべきものを)。まして、かう待ちきこえたまひけるが、心苦しきこと(ましてこうお待ち申されては恐縮する)」

と、参りたまふべきこと思し\*まうく(と姫宮が朱雀院に御会いに出向かれるように手筈をお考えなさいます)。 \*「まうく」は「設く」で<準備する、手筈を整える>。

「ついでなく、すさまじきさまにてやは、はひ渡りたまふべき(ただのお見舞いという物寂しい形では姫宮がどうして朱雀院にお出掛け為されましようか)。何わざをしてか(何か工夫を凝らして)、御覽ぜさせたまふべき(兄院にはお楽しみ頂きたい)」

と、思しめぐらす(と思ひ巡らしなさいます)。

「\*このたび足りたまはむ年(来年は入道院が五十歳におなりなので)、若菜など調じてや(お祝いに七草粥などを用意しようか)」と、思して(とお思いになって)、さまさまの\*御法服のこと(さまさまな法衣類の仕立てや)、齋の御まうけのしつらひ(精進料理での御接待の仕方と)、何くれとさまことに変はれることどもなれば(仏式の事で何かと普通の宴席とは異なる様式なので)、\*人の御心しつらひども入りつつ(夫人方の御作法知識も取り入れつつ)、思しめぐらす(お考えになります)。 \*「このたび」は<今度、今回、この際>だが、此处では姫宮が参院為さることになるであろう際という文意で<その来年は>という言い方、になっているらしい。「足る」は<見合う>。注には<「足りたまはむ年」とは、朱雀院が来年ちょうど五十歳に達する年という意。>とある。朱雀院は上皇なので、五十の賀を祝うのは当然、という常識が当時の宮廷読者にあつたとしても、朱雀院がこの年で四十九で来年が五十歳だということに誰もが関心を持っていた、とは思えないが、こういう肝心の対象語を省くという語り口には私は違和感を禁じ得ない、その分かり難さに閉口する。「若菜」は大辞泉に<年頭の祝儀に用いる七種の新菜。古く宮中で、正月の初の子(ね)の日(のち7日)に、万病を除くとしてこれを羹(あつもの)にして食べる習わしがあった。>とあり是が七草粥の元となつたと説明されているが、此处では五十賀の祝い事としての<特別な催し>を意味していそうで、「若菜上」が源氏殿の四十賀にまつわる話題、この「若菜下」が朱雀院の五十賀にまつわる話題、というのが巻名を施した説明になっていそうだが、それも後付けのことだろうし、私如き者にはとても素直に読み進めたものではない。 \*「御法服(おんほふぶく)」は朱雀院に献上する<法衣類>。「齋(いもひ)」は<物忌み謹慎>または<精進料理>と大辞林にある。 \*「人の御心しつらひども」は注に<六条院のご夫人方の意見をさす。>とある。「人」が<六条院のご夫人方>とは私には判然としないが、とすれば、特に花散里の作法知識に負うところが多かつたのだろう。

いにしへも(朱雀院は昔も)、遊びの方に御心とどめさせたまへりしかば(音曲の方面に御興味をお持ちでいらしたので)、舞人、楽人などを、心ことに定め(舞手や囃子手などを特に厳選して)、すぐれたる限りをととのへさせたまふ(すぐれた者たちだけをお揃えあそばします)。

\*右の大殿の御子ども二人、大将の御子、\*典侍の腹の加へて三人、まだ小さき七つより上のは、皆\*殿上せさせたまふ(右大臣の御子の二人と源君の御子は典侍腹のを加えた三人の、まだ元服前の七歳以上の孫は皆、御所へ行儀見習いに出して舞楽を習わせなさいます)。 \*「右の大殿の御子ども二人」は北の方たる源氏養女腹の御子二人で、六年前の源氏殿の四十賀若菜の長寿祝いに三歳と二歳の子を連れて六条院に参上していた(若菜上五章二段)ので、本年で9歳と8歳。因みに、この年で右大臣は42歳、北の方は32歳。先妻の式部卿宮女は46歳、その娘で兵部卿宮に嫁いだ真木柱姫は22歳、その第二人は九年前の先妻の里帰りの場面で真木柱卷三章五段に<男君たち、十なるは殿上したまふ。>と<次の君は八つばかりにて>とあったので、今は19歳と17歳。 \*「典侍の腹の」大将の御子に付いては本章二段に花散里御方が引き取って育てていると既に触れられていたが、幼児ではなかったらしい。大将の御子については、若菜上五章二段の源氏殿四十賀若菜の祝いの場面で、養女が幼児二人を連れて参院したにも関わらず、源君が子供を見せに来ないことを<「中納言のいつしかと儲けたなるを、ことごとしく思ひ隔ててまだ見せずかし」>と源氏殿が不平めいた冗談にしていたが、その子がこの典侍腹の子なのか、正妻腹の子なのか、両方なのか、未だに分からない。此処の文からだけでは大将の子息が全部で何人なのか、誰が正妻腹で誰が典侍腹七日、全く分らない。ただ、此処で語られる三人の子の三男坊は本年で7歳になるらしい。 \*「殿上せさせたまふ」は<御所の見習い勤めをさせなさる>のだろうが、此処の話題は朱雀院の五十賀の若菜の祝典なのだから、その宴席に向けての<舞楽の修行をさせてみなさる>のだろう。

兵部卿宮の\*童孫王(それより年若い兵部卿宮の御子をはじめに故桐壺院の子孫たる)、すべてさるべき宮たちの御子ども(全ての朱雀院の弟宮たちの御子たち)、家の子の君たち(名家の男の子たちを)、皆選び出でたまふ(皆選び出しなさいます)。 \*「童孫王(わらはそんわう)」とは何か。「わらは」は元服前の子供、ではあるのだろう。「そんわう」は<天皇の孫>と古語辞典にあるが、であれば、此処に言う「天皇」は故桐壺院であり、「さるべき宮たち」は即ち<朱雀院の弟宮たち>であり、その「御子ども」を示すための「孫=子孫」という言い方であり、その代表が「兵部卿宮の童孫王」たる幼い子供であり、であれば、真木柱姫との間の子なのだろう。

殿上の君達も(より年長の御所勤めをする若い貴公子たちも)、容貌よく、同じき舞の姿も、心ことなるべきを定めて(姿が美しく舞いの演技にも優れたものを選んで)、あまたの舞のまうけをせさせたまふ(いくつもの舞曲を練習させなさいます)。

いみじかるべきたびのこととて(格別な祝宴という事で)、皆人心を尽くしたまひてなむ(それぞれれの任となる人は皆とても熱心に取り組みなされたのです)。道々のものの師、上手、暇なきころなり(その道々の師匠や名人は教授に忙しいといったことになりました)。

#### [第四段 女三の宮に琴を伝授]

\*宮は(姫宮は)、もとより\*琴の御琴をなむ習ひたまひけるを(六条院に嫁ぐ前から七弦古琴を習っていらっしやったが)、\*いと若くて院にもひき別れたてまつりたまひしかば(15歳というとても若い年で嫁がれて父院の朱雀院とはお別れ申しなされたので)、\*おぼつかなく思して(朱雀院は懐かしくお思いになって)、 \*「宮」は女三の宮のこと、らしい。文意からして、私にもそれらしい気はする。が、何故、「姫宮」としないのか。一度明示された後の文で省略されるのは分かるが、兵部卿宮やその他の「さるべき宮たち」も話題にした後で、単に「宮」とだけ言う感性には嫌気する。 \*「琴の御琴」は「きんのおんこと」で<七弦古琴>のこと、らしい。七弦古琴は琴柱が無く押弦で音程を取る楽器とのこと。 \*「おぼつかなし」は<はつき

りしない→はっきり知りたい>だが、この場合は「もとより琴の御琴をなむ習ひたまひける」ものが今どうなのか<気懸かり>なのだから<懐かしんで>いるのだろう。\*「いと若くて院にもひき別れたてまつりたまひし」とあるが、姫宮は15歳で五年前に六条院に興入れした。11歳で入内した桐壺女御が13歳で皇太子を産んだのと同じ年のことである事を見れば、年が若すぎると言うよりは、成長が幼すぎたのだろう。

「参りたまはむついでに(此方に参りなさる時には)、かの御琴の音なむ聞かまほしき(姫宮の古琴が聞きたいものです)。\*さりとも琴ばかりは弾き取りたまひつらむ(六条院は姫宮を格別に遇してはいらっしやらないようでもあるようだが、いくら何でも古琴だけは手ほどきが有って宮も上達なされたことだろう)」\*「さりとも」は<いくら何でも>という言い方で、その対象体はどうやら<源氏殿の姫宮への薄情>らしい。少なくとも、上皇の皇女だというのに、対の上に増える厚遇は受けていらっしやらない、という話は、例えば衛門督藤原君などから朱雀院は聞き及んでいる訳なので、源氏殿の姫宮への持て成しには不本意な所があるものの、それでも娘に古琴は習わせたし、それを源氏殿も知っているし、源氏殿は古琴の名手なのだから、姫に親しく古琴の手ほどきぐらいはしているだろう、それさえ無いとしたら事態は相当に深刻だ、という判断基準にしようとする朱雀院の考え方、を示した文ではあるようだ。注には「さりとも琴ばかりは」の文意を<女三の宮、源氏に嫁して六年。『集成』は「琴の名手である源氏に嫁してもう七年にもなるのだから、といった気持がある」。『完訳』は「女宮の琴の巧拙に、源氏の情愛の厚薄を判断しようとする」と注す。>としてある。が、私には、この「さりとも」が本当にそういう文意なのかは、俄かには読み取り切れなかった。例えば、この「さりとも」を、上文の「もとより琴の御琴をなむ習ひたまひけるを、いと若くて院にもひき別れたてまつりたまひしかば、おぼつかなく思して」を受けた言い方と取って、以前は然程の腕前ではなかった古琴演奏が<今は違って>という意味にも読めそうにも思う。が、下に「しりうごとに聞こえたまひける」とあって、朱雀院が源氏殿に相当な不信や不審を持って斜に見ていることが明示されているので、こうした文意が確からしく思えた。

と、\*しりうごとに聞こえたまひけるを(と源氏殿の待遇を探り申しなさろうという御内意の有るを)、内裏にも聞こし召して(帝もお聞きあそばして)、\*「しりうごと」は「後言」で<悪口、陰口>という意味で使われることが多いようだが、括弧で囲むように校訂された朱雀院の会話ないし内心文は姫宮の演奏についての言い方になっていて、陰口というよりは本心ないし内意と言うべきものに思える。

「\*げに(確かに古琴の名手の源氏殿の妻であれば)、さりとも(以前とは違って)、けはひことならむかし(姫宮の腕前も格別なものに成っているだろう)。院の御前にて、手尽くしたまはむついでに、参り来て聞かばや(父院の御前で姫宮が優れた演奏を為さる時には私も参院して聞きたいものだ)」\*「げにさりとも」は注に<以下「参り来て聞かばや」まで、帝の詞。「げに」について、『集成』は「これも、源氏の膝下にあるのだからという気持」。『完訳』は「院の「さりとも」を肯定的に受けとめ、今は名手源氏の指導を得て上達していよう、とする」と注す。>とある。この「さりとも」も、帝は藤原君などから源氏殿の悪口を聞いていただろうから、源氏殿への不信がやはりあるのだろう。が、父である朱雀院ほどには妹宮である女三の宮への同情は強くないかも知れない。だから、この「さりとも」は『完訳』の指摘通りに「名手源氏の指導を得て上達していよう」の文意で<今は昔と違って>という言い方に近い、ように思う。

などのたまはせけるを(などと仰せあそばしたのを)、\*大殿の君は伝へ聞きたまひて(主催者である源氏殿は伝え聞きなされて)、\*「おとどのきみ」の「君」には、どうも意図を感じる。此处では若菜祝宴の<主催者>と見て置く。

「年ごろさりぬべきついでごとには、教へきこゆることもあるを(今まで何かの折々には姫宮に古琴奏法をお教え申し上げたこともあるので)、そのけはひは、げにまさりたまひにたれど(その腕前は確かに以前よりは上達なさっているが)、まだ聞こし召しどころあるもの深き手には及ばぬを(まだ主上や朱雀院にお聞かせ申し上げるほどの名演奏には至らないものを)、何心もなく参りたまへらむついでに(それなりの準備無しに折角参院為さったのだからと)、聞こし召さむとゆるしなくゆかしがらせたまはむは(宮の演奏をご所望になり是非にとお望みあそばせば)、いとはしたなかるべきことにも(とても具合の悪いことにも、なりかねない)」

と、いとほしく思して(と懸念なさって)、このころぞ御心とどめて教へきこえたまふ(最近は熱心に宮に古琴を教え申しなさいます)。

\*調べことなる手、二つ三つ(名曲の奏法を二つ三つ)、おもしろき\*大曲どもの(それらは興味深い長い曲で)、四季につけて変はるべき響き(四季に応じて変えるべき弾き方で)、\*空の寒さぬるさをととのへ出でて(季節の寒さや暖かさを表現して)、やむごとなかるべき手の限りを(秘伝の奥義を)、取り立てて教へきこえたまふに(殿は特別に姫宮に教え申しなさったので)、心もとなくおはするやうなれど(意味が分からず困っていらっしゃるようでも)、やうやう心得たまふままに(次第に宮も理解なさって)、いとよくなりたまふ(とても上達なさいました)。 \*「調べことなる手」は注に<『集成』は「珍しい旋律の曲」。『完訳』は「特別に調べの変った曲」と注す。>とある。古琴は押弦楽器なので、基本調弦を変えずに琴柱の置き場所で曲ごとに調弦する他の琴類とは違って、基本調弦自体を変えて開放弦状態での響きを変えたり、例えば同じ左手運指でも違う趣を奏でる、ということが可能な楽器だろうから、他の琴類とは違う独自の調弦法や奏法や、それらに基づく曲などがありそうで、此处の文意を<珍しい曲>と取ることは十分に説得力が有りそうだ。が、それは「大曲」とは別の<小曲を>、という解釈なのだろう。それでも良いのだろうが、私はむしろこの「調べことなる手」を「大曲」の説明と取って、「調べ」を<曲>、「ことなる」を<格別な>、「手」を<奏法>と読みたい。その方が面倒臭くないし、文自体の説得力が増す気がする。 \*「大曲(だいごく)」は<『完訳』は「帖を曲の単位として、一帖だけのものを小曲、数帖を中曲、十数帖を大曲と称すという」と注す。>と注にある。 \*「空の寒さぬるさをととのへ出でて」について、注には<琴(七絃琴)の音色に気候の温暖を調節させる霊妙な力があるという思想。『花鳥余情』所引「琴書」に見える。>とある。そういう認識に基づく言い方、ということらしい。それはそれで良いとしても、およそ楽器というものは人の情感に訴える道具だろうから、何も古琴だけが四季の違いを表現した訳でもなく、全ての楽器がその楽器に応じた奏法で四季の変化を含む様々な情感を表現する筈だ。ただ、複数弦を調弦した和音楽器は一掻きで場を示せる、ということはあるのかも知れない。但し、それは古琴のみならず琴類の特性なのだろうが。

「昼は、いと人しげく(昼は人の動きが多く)、なほ一度も\*揺し按ずる暇も(ほんの一回の弦を揺らして音の変化を調べるにも)、心あわたたしければ(集中できないので)、夜々なむ(よるよるなむ、夜な夜な)、静かに\*ことの心もしめたてまつるべき(静かに奏法の勘所をじっくり教え申し上げねばならない)」 \*「揺す(ゆす)」は<琴をひく時、左の手で弦を押してゆする。>と古語辞典にある。琴柱の裏を押す場合は音程を上げるので、ギターのチョーキングに近いが、古琴では押し指を震わすビブラート奏法に近いのだろう。であれば、より繊細な音の違いを聞き分ける為に静寂さは必要だったかも知れない。 \*「ことの心もしむ」は相当にイヤラシイ響きを持った言い回しだ。勿論、表向きは「琴の心も染む」で<古琴の奏法を深く教える>だが、そのためにも何処を如何揺ると如何いう声が出るのかという、性愛の<コトの奥義をじっくり教え



る>という王家文化の継承が意図されてこそ、朱雀院の本懐にも応え得る、というものだ。この「たてまつる」の何とイヤラシイこと。多分急所は<染む=じっくり>だ。

とて(ということで)、対にも、そのころは御暇聞こえたまひて(対の上にもその頃は留守居をお断り申しなさって)、明け暮れ教へきこえたまふ(殿は姫宮の御部屋にこもって一日中コトの奥義を教え申しなさいます)。

#### [第五段 明石女御、懐妊して里下り]

\*女御の君にも(姫君である桐壺女御にも)、対の上にも(実質の正妻たる東の対の紫の上にも)、琴は(きんは、殿は古琴を)習はしたてまつりたまはざりければ(習わせ申し上げなさらなかった)ので、この折、をさをさ耳馴れぬ手ども弾きたまふらむを(最近はめったに聞き慣れない古琴の曲を宮がお弾きになっているらしいのを)、ゆかしと思して(聞いてみたくて)、女御も、わざとありがたき御暇を(女御もわざわざ得難い帝の外出許可を)、ただしばしと聞こえたまひてまかだたまへり(短期間だけと願い出なさって里下がりなさっていらっしやいました)。\*「女御の君」は一般的な呼称ではないように思う。この「君」は<姫君>の意で、六条院目線での<姫君である桐壺女御>という言い方、と私は読んで置く。

\*御子二所おはするを(みこふたところおはするを、女御は御子が二人いらしたが)、またもけしきばみたまひて(また御懐妊なさって)、五月(いつつき、五ヶ月)ばかりにぞなりたまへれば(ほどにお成りだったので)、\*神事などにことづけておはしますなりけり(神事の穢れ払いを理由立てて十二月初めに御所から退出していらしたので)。\*「御子二所おはする」については、注に<明石女御、妊娠五月になる。『集成』は「すでに女御の手許を離れている東宮と女一の宮は除いた、二の宮と三の宮であろう。前に「御子たちあまた数添ひたまひて」(若菜下)とあった。『完訳』は「一皇子一皇女がいる」と注す。>とある。『集成』の注釈は何を言っているのか私には分からない。確かに、「御子たちあまた数添ひたまひて」(本巻二章一段)とはあったし、普通は一人では決して、二人でも滅多に、やはり三人以上を「あまた」とは言いそうだが、それは他の妃を圧する帝の寵愛ぶりから桐壺妃の勢いを示した言い方だった、のかも知れない。脱稿があったのかどうかは分からないが、「御子たちあまた数添ひたまひて」には少なからず唐突感を覚えたし。いや、しかし実際にこの時点で桐壺妃が子を四人儲けていて、更に五人目を孕んでいた、ということは有り得るし、そのことが何処かに後述されているなら、むしろそれを示して説明して欲しいところだ。で、それが無い限りでは、此処の文意は、子供は既に二人産んでいて、更にもう一人腹に居る、と取れる。桐壺妃はこの年で18歳だが、第一子の皇太子が6歳だから、五年前の13歳で産んだという若年出産だ。そこに帝の溢れる精気が施されれば、第一子を産んだ後の、この五年間に三人産んでいても不思議でもないが、此処の「御子二所おはする」は、子供は二人居た、ことの明示と見るのが素直な読み方だ。\*「神事(かんわざ)などにことづけて」については、注に<『集成』は「十一月から十二月の初旬にかけて神事が多い」と注す。『拾芥抄』に「凡そ宮女の懐妊せる者は、散齋の前に、退出すべし。月の事有る者は、祭日の前に、宿廬に退下すべし、殿に上るを得ず。其の三月・九月は、潔齋の前に、預り宮外に退出すべし」(触穢部)とある。明石女御は妊娠五月。散齋(祭に先立ち七日間の身体上の潔齋をすること)の前に、退出した。>とある。「散齋(さんさい)」は「荒忌(あらいみ)」のこと、と大辞泉にある。「荒忌」は<祭祀(さいし)の際、神事に従事する者が真忌(まい)みの前後に行う物忌み。大忌(おおみ)。さんさい。>とある。「真忌(まいみ)」は<祭祀の際、神事に携わる人が、荒忌(あらいみ)みのあとで厳重に行う物忌み。致齋(ちさい)。>とある。「散齋」はざっと予行謹慎で、妊婦は更にそれ以前に謹慎退去すべし、ということらしい。で、桐壺女御はそれを好機と里

下がりしたらしい。なお、下に「十一日過ぐしては参りたまふべき」とあり、注に<十二月十一日に宮中では神今食の神事がある。明石女御の退出はそれに先立つ七日前の、十二月初めに宮中退出となろう。>とあるので、従う。「神今食(じんこんじき)」は<平安時代、宮廷の年中行事の一。陰暦6月・12月の11日に行われる月次祭(つきなみのまつり)の夜、神嘉殿に天照大神(あまてらすおおみかみ)を祭り、天皇がみずから火を改め、新たに飯を炊いて供え、みずからも食する神事。かむいまけ。じんこじき。《季 夏》>と大辞泉にある。

\*十一日過ぐしては、参りたまふべき御消息うちしきりあれど(十一日の神今食が過ぎたら妊婦の祭事謹慎も解けるので御所に戻りなされるようにとの帝からの御催促がしきりにあるが)、かかるついでに(この機に際して)、かくおもしろき夜々の御遊びをうらやましく(このように面白い夜毎の楽器演奏が羨ましく)、「などで我に伝へたまはざりけむ(どうして父君は私に古琴をお教え下さらなかったのだろう)」と、つらく思ひきこえたまふ(と桐壺女御は残念に思い申しなさいます)。\*「十一日(じふいちにち)」は十二月十一日のことで「神今食」の祭事がある、とのこと。その日が過ぎれば、妊婦の穢れも御所暮らしに支障が無い、ということらしい。

\*冬の夜の月は(殿は冬の夜の月を)、人に違ひてめでたまふ御心なれば(人とは違って賞美なさる御心なので)、おもしろき夜の雪の光に(美しい夜の雪の光に)、折に合ひたる手ども弾きたまひつつ(良く似合う曲を弾きなさっては)、さぶらふ人びとも(側居する女房たちの)、すこしこの方にほのめきたるに(いくらか音曲に心得のある者に)、御琴どもとりどりに弾かせて(弦楽器をそれぞれの得意なものを弾かせて)、遊びなどしたまふ(合奏なさいます)。\*「冬の夜の月は人に違ひてめでたまふ御心なれば」について、注に<源氏の性向。冬の夜の月を賞美する心は、「朝顔」巻(第三章二段)に語られていた。>とある。気付かなかった注で改めて朝顔巻三章二段を見直すと、其処には源氏殿の発言として<「時々つけても人の心を移すめる花紅葉の盛りよりも、冬の夜の澄める月に雪の光りあひたる空こそ、あやしく、色なきものの、身にしみて、この世のほかのことまで思ひ流され、おもしろさもあはれさも残らぬ折なれ。すさまじきためしに言ひ置きけむ人の心浅さよ」>とあった。なるほど、多くの人が花紅葉の盛りを好む、のは確かだろうが、「冬の夜の澄める月に雪の光りあひたる空」にも多くの人が情趣を感じるもので、殊更に「人に違ひて」という言い方には、源氏殿の人格設定に人に秀でた審美眼を付与しようとする、かの作者のいくらか強引な意図を感じる。マ、そんなことを言い出したら限りがない気もするが。

年の暮れつ方は、\*対などにはいそがしく(年の暮れには対の上などにとっては忙しく)、こなたかなたの御いとなみに(あれこれの正月準備に)、おのづから御覧じ入ることどもあれば(当然に目配せなさらずには居られないので)、\*「対などにはいそがしく」の文意については、注に<紫の上は六条院全体をとりしきる立場にある。衣配りなど正月の準備に余念がない。>とある。

「春のうららかならむ夕べなどに(春のうららかな夕べなどになったら)、いかでこの御琴の音聞かむ(ゆっくりとこの御琴の音を聞きたい)」とのたまひわたるに(と仰っている内に)、\*年返りぬ(年が改まりました)。\*「年返りぬ」について、注には登場人物の年齢を<源氏四十七歳。源氏の夫人方、紫の上三十七歳、女三の宮二十一、二歳、明石御方三十八歳。源氏の子、夕霧大納言兼右大将二十六歳、明石女御十九歳。その他の人々、皇族方、一の院(朱雀院)五十歳、新院(冷泉院)二十九歳、今上帝二十一歳、東宮七歳。一般臣下、柏木中納言兼衛門督三十一、二歳、鬚黒右大臣兼左大将四十二、三歳。>とどのように整理してある。明石御方と衛門督藤原君については今までに明示がない。もし後述に明示があれば当然に従うが、紫の上の年齢変更もあるようだし、私は私なりの解釈で整理しなおして置きたい。即ち、源氏殿 47 歳。夫人方としては、紫の上 37

歳、女三の宮 21 歳、明石御方は従前どおりなら 42 歳になる筈だが、紫の上との年齢差に合わせるなら 39 歳だろうか。また、花散里は 50 歳代前半、末摘や空蝉も源氏殿よりは年上で 50 歳前後と思われる。子供たちは、右大將源君 26 歳、桐壺女御 19 歳。また、養女の秋好中宮 38 歳、右大臣の北の方 33 歳。皇族方は、朱雀院 50 歳、冷泉院 29 歳、今上帝 21 歳、皇太子 7 歳。また、兵部卿宮 44 歳、式部卿宮 62 歳。権勢家は、藤原殿 53 歳、衛門督藤原君 32 歳、右大臣兼左大將藤原右家源氏婿殿 43 歳。

#### [第六段 朱雀院の御賀を二月十日過ぎと決定]

院の御賀(朱雀院の五十歳御祝いは)、まづ朝廷よりせさせたまふことどもこちたきに(先ず帝からお挙げあそばす儀式が盛大なので)、さしあひては便なく思されて(重なっては不都合にお思いなさって)、すこしほど過ぎしたまふ(六条院からの御祝賀は少し後になさいます)。二月十余日と定めたまひて(そして、その日取りを二月十日過ぎと決めなさって)、楽人、舞人など参りつつ、御遊び絶えず(その日の演舞の稽古の為に、楽人や舞人などが参上して六条院は音曲の賑やかさが絶えません)。

「\*この対に(其処の対に居る人が)、常にゆかしくする\*御琴の音(いつも聞きたがっているあなたがお弾きになる御琴の音なので)、いかで\*かの人びとの箏、琵琶の音も合はせて(どうか都合を付けて他の御方々の箏や琵琶の音も合わせて)、\*女楽試みさせむ(女たちでの合奏をさせてみよう)。\*「この対」については、注に<以下「をさをさあらじ」まで、源氏の詞。『完訳』は「この対」は紫の上。女宮のもとにいながら身近な呼び方をする>と注す。>とある。親しげな呼び方に聞こえる、という指摘は面白い。ただ、「この対に」の「に」が「の」でないことから、「この対」は正に<此処の寝殿の東の対>という場所の言い方で、直接には<紫の上>を呼んでいない、ようにも見える。場所を示す事で、その話題にある特定の関係者を、そのいくらかの環境も含めて呼称する、というのは、ヒトの言語認識方法の一般的語用で、何も日本語の特性ではないだろうが、此処では意識的にぼかした言い方をした、とも思える。\*「御琴」は宮が弾く古琴だが、殿は「おんこと」という言い方をしている。殿は宮に話しているので「おおん」は話し相手の宮に対しての<あなたの>という敬称であり、「こと」は<弦楽器一般>の意味の語で、特に「琴」の種類を指摘する場面ではないので、殿はこういう平易な言い方をした、ということなのだろう。勿論、実際には宮は古琴を練習しているので、この「御琴」が客観的には<古琴>を意味するのは場の必然ではある。\*「かの人びとの箏、琵琶」は特定の人が演奏する特定の楽器を示していそうな言い方だ。注には<箏は明石女御、琵琶を明石御方、紫の上には和琴、そして女三の宮が琴の琴で女楽を演奏する。>とある。この編成は後述されるのだろうが、明石入道が箏と琵琶の名手で明石御方はその手ほどきを受けていた、ということは明石巻二章で入道が娘を光君に引き合せる雅な事情として語られていた。\*「女楽(をんながく)」は<女ばかりで演奏する音楽。>と大辞林にある。また、「ぢょがく」との読みでは<奈良・平安時代、内教坊(ないきょうぼう)の妓女(ぎじょ)たちによって行われた雅楽。>ともあり、一定の様式が組まれた合奏法が在ったかの印象だ。此処では<六条院での私的な女たちだけの演奏>という意味で言っているのだろうが、女たちの楽器演奏自体は「遊び」として日常的にあったように既に語られているので、殿が「女楽」という言葉を使った意図には、ある程度正式な様式での合奏、を意味していたのだろう。

ただ今のものの上手どもこそ(最近の楽器の名手と言っても)、さらにこのわたりの人びとの\*御心しらひどもにまさらね(少しもこの六条院の人たちの音曲に対する御造詣の深さに勝りはしません)。\*「御心しらひ」は<御心用意=御教養=御造詣>あたりだろうか。「しらふ」は<互いにし合う>と古語辞典にあり、何かを<仕合わす=程度を探り合う=見計らう>ような語感だ。現代語にも「あしらう」が<上手く

さばく>という意味で引き継がれている。尤も、「このわたりの人びとの御心しらひども」は全て殿が仕込んだという自負があつての言い草なので、それが「ただ今のものの上手ども」に勝っている、というのは、源氏殿の権勢の前には誰も異を唱え難いので、本当にお目出度い自慢話だ。

はかばかしく伝へ取りたることは、をさをさなけれど、何ごとも、いかで心に知らぬことあらじとなむ、幼きほどに思ひしかば(きちんと伝授を受けたことは、ほとんどありませんが、どのようなことでも、何とかして知らないことがないようにと、子供の時に思ったので)、世にあるものの師といふ限り(世に広く認められた名人と言われる人の全て)、また高き家々の(また高貴な家々の)、さるべき人の伝へどもをも(聖人と言われた人の秘伝の数々も)、残さず試みし中に(残さず実演してみた中に)、\*いと深く恥づかしきかなとおぼゆる際の人なむなかりし(本当に感銘して深く恐れ入ったと思えるほどの人というのは居ませんでした)。 \*「いと深く恥づかしきかなとおぼゆる際の人なむなかりし」と本人が言っているのだから、そうですか、と一読者は思う他はないが、「なかりし」に明石入道も含むのか、それとも彼は別格なのか。もう今からは二十年前のことになるが、当時は殿も流浪の身の頼り無さもあつたのかも知れないが、明石巻二章五段あたりでの語りでは、入道の箏の腕前には殿もなかなか感心していたようだし、その音曲への造詣の深さが明石御方への興味に繋がったような話運びでもあつた、かと思うので、是はいくらか女子供相手の殿の強がりのように聞こえなくも無い。

そのかみよりも(その私が若かつた当時に比べても)、またこのころの若き人びとの(更に最近の若い人びとは)、\*されよしめき過ぐすに(基本を怠って、派手な所作をこなすことで風流ぶって気取り過ぎた演奏をするので)、はた浅くなりたるべし(いっそう深い味わいの無いものになっているようです)。 \*「さる」は<洒落る、風流がる>で、悪口の場合は多くは<はしゃぐ>という語感らしい。派手な目立つ所作を押さえて細かい点は誤魔化す、というのは一発芸の物真似を思わせる。「よし」は<由緒>だが、「よしめく」は<由緒ありげにする>で、是も特徴的な一部分を真似て後は誤魔化す、という印象だ。で、「されよしめき過ぐす」はざっと<格好を着けることに気を使いすぎる>。で、本質を備えた結果に格好が着く、という正道を忘れた手抜きの方法といった批判。で、今でも全く同様の言い方が多く見られて、若者の浅はかさに苦言する物の言い方が昔から変わらないということは、逆に言えば、若者はいつも先人の一定の成果を身に着けなければならない重荷を背負わされていて、万人が有能とは限らないのに期待されていて、だから何とか格好を着けなければならない、という事情を示しているのかも知れない。ただ、格好を付けることが追求されて、多くの人がそれを身に付けると、その技法は廃れたように、特に今日の消費社会では見られがちのような気がするが、それが多分、知の共有の一実体ではありそうだ。流行物が本物になった、ということかも知れない。どういう道を通っても、技術や技法は物事が出来ればそれで良いのだ。どうせ専門家はいつも別の次元で物を考えている。

琴はた(きんはた、古琴はまたその理解が浅いどころか)、まして、さらにまねぶ人なくなりたりとか(一層更に学ぶ人がいなくなっているとか)。この御琴の音ばかりだに伝へたる人(あなたの御琴の音色の他に私が教えた人は)、をさをさあらじ(居ないのですから)」

とのたまへば(と殿が仰ると)、何心なくうち笑みてうれしく(宮は無邪気に微笑んで嬉しく)、「かくゆるしたまふほどになりける(私もこのように殿がお認め下さるほどに上達したんだ)」と思す(とお思いになります)。

二十一、二ばかりになりたまへど(宮は21,2歳にお成りだが)、なほいとみじく片なりに(まだとても自立心に欠けて)、きびはなる心地して(人頼みの考え方で)、細くあえかにうつくしくのみ見えたまふ(ほっそりと上品で可愛らしくのみお見えになります)。

「院にも見えたてまつりたまはで、年経ぬるを(父院に御会いなさらないまま何年も経ったので)、ねびまさりたまひにけりと御覧ずばかり(よくご成人なさったと御覧頂けるように)、用意加へて見えたてまつりたまへ(もっと考え方をしっかりと持ってお会いなされますよう)」

と、ことに触れて教へきこえたまふ(と殿は宮にことに触れて教え申しなさいます)。

「げに、かかる御後見なくては(全くこの殿のような御世話役無しでは)、ましていはけなくおはします御ありさま(今以上に幼くいらっしゃる宮のお姿を)、隠れなからまし(世間に隠しようもなかったらう)」

と、人びとも見たてまつる(と宮付きの女房たちも拝し申します)。